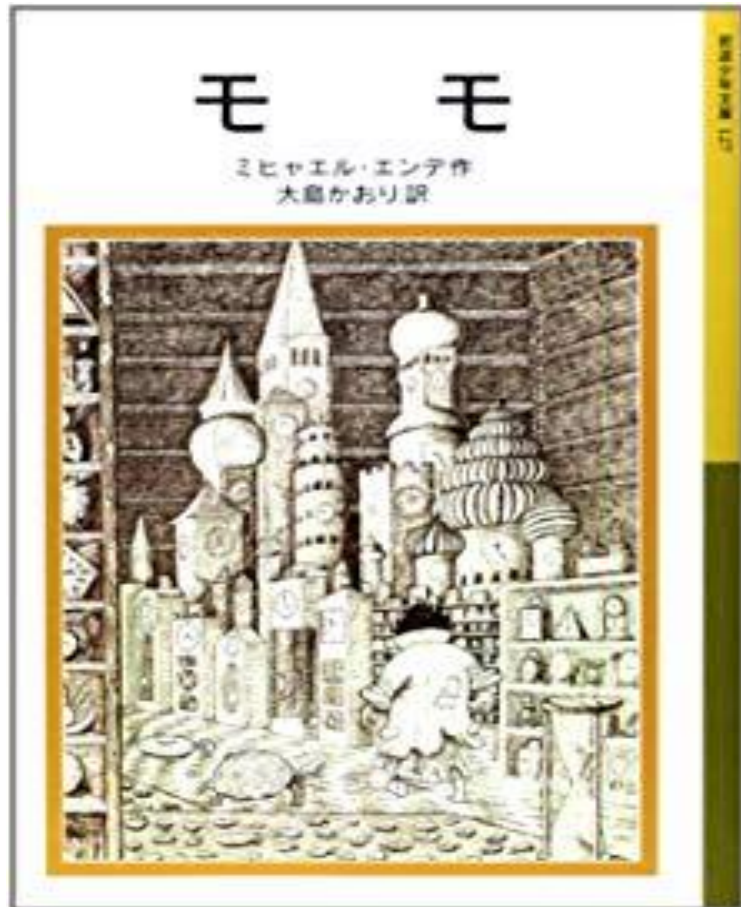


人類学的知性で価値形態を読む



2021年11月7日
榎原 均

第一部 現代社会を人類学的視点で斬る視点

- 基礎講座開講にあたって
- 第一部 現代社会を人類学的視点で斬る視点
- 1. 人類学的手法の妥当性
- 2. 手法としての具体の科学とプリコラージュ
- 3. レヴィストロースの経歴
- 4. 構造主義とは

第二部 価値形態を人類学的知性で読む

- 1. マルクスによる貨幣生成の秘密の消去
 - ①現行版『資本論』価値形態論
 - ②平易化による貨幣生成過程の消去
- 2. 商品から貨幣が、商品所有者たちの無意識のうちでの本能的共同行為によって生成される仕組み
- 3. まとめに代えて
 - ①商品・貨幣・資本という「目に見えない構造」の解明
 - ②資本への対抗の路線
 - ③階級闘争の理論の総括
 - ④陣地戦の理論確立に向けて

追加資料：商品から貨幣を生成させない交易関係の構想

- はじめに
- F) 第Ⅵ形態（誰もが貨幣形態になりうる＝地域通貨＝一般市場の外部）
- G) 第Ⅶ形態（貨幣形態なし＝労働に応じた分配＜労働証書制＞＝もはや価値形態ではない）
- 『ゴータ綱領批判』からの引用

第一部からの展開 パンドラの箱を開く



レヴィ＝ストロースとラトウールの科学批判

- レヴィ＝ストロースは、野生の思考に具体の科学と神話のセットを見いだした。感覚で知覚できる森羅万象の博学的知識（具体の科学）のプリコラージュによる神話の生成と神話による倫理の展開。
- 「神話がしているように、正しい人間主義は、自分自身から始めるのではなく、人間のまえにまず生命を、生命のまえには世界を優先し、自己を愛する以前にまず他の存在に敬意を払う必要がある」
- この事態はあとで見るように、商品の価値形態の本性であるが、人間は無意識のうちに商品の本性に意志支配されることで、この神話の倫理を捨ててしまったのではないか。
- 精密科学は神話のように全面的な因果関係を公準とはせず、全体から部分を切り出して、そこでの因果関係しか問題にしない。

- ラトウールの場合
- ボイルの実験は、自然法則の解明だとされているが、そうではないというのがラトウールの主張。実験自体人工物だから、そこから導かれた法則も人工的な構築物ではないのか。他方、人工物とみなされている社会自体も、人工物以外の自然物(非人間)に満ち溢れている。近代知は自然科学による自然法則の解明と、社会契約による人工物としての社会の解明をめざす社会科学という二つの科学によって認識するが、この中間にあるものの認識こそが大事で、この認識のためには人類学を発達させるしかない。
- ラトウールは、パンドラの箱を好んで使い、残された希望の解明を人類学に託している。

第二部からの展開 グレーバーとエンデ

- グレーバー『負債論』は、人類学者による貨幣研究。古代メソポタミアでは、信用取引が広範に行われていたが、彼は鑄貨よりも信用の方が古かったとして、信用の本質である負債を研究し、貨幣が登場し負債が生み出されることで、人間はその生存の前提であり金銭では測りきれない宇宙をも取引の対象と見なすようになっていく、という観点から、貨幣の批判を行った。
- エンデは『モモ』で、物を買うお金と商品化されたお金を区別し、後者に諸悪の根源を見た。「お金は人間が作ったものです。変えることができますはずですよ」と述べて、そのためには意識の跳躍が必要だと考えた。

『資本論』現行版価値形態論

- A) 第 I 形態 (簡単な価値形態)
 - X量の商品A = Y量の商品B
- B) 第 II 形態 (全体的な価値形態)
 - X量の商品A = Y量の商品B
 - = Z量の商品C
 - = W量の商品D
 - =

C) 第Ⅲ形態(一般的な価値形態)

$$\begin{array}{l} Y \text{ 量の商品 B} \\ Z \text{ 量の商品 C} \\ W \text{ 量の商品 D} \\ \dots\dots \end{array} \begin{array}{l} = \\ = \\ = \\ = \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} Y \\ Z \\ W \\ \dots\dots \end{array}} \right\} X \text{ 量の商品 A}$$

D) 第Ⅳ形態(貨幣形態)

$$\begin{array}{l} Y \text{ 量の商品 B} \\ Z \text{ 量の商品 C} \\ W \text{ 量の商品 D} \\ \dots\dots \end{array} \begin{array}{l} = \\ = \\ = \\ = \end{array} \left. \vphantom{\begin{array}{l} Y \\ Z \\ W \\ \dots\dots \end{array}} \right\} V \text{ 量の金}$$

貨幣形態に変更されたこの形態は、人格が登場しない価値形態論では、貨幣生成不可能を主張したもの

D) 第IV形態(初版本文第IV形態)

X 量の商品 A = Y 量の商品 B
= Z 量の商品 C
= W 量の商品 D
=

Y 量の商品 B = X 量の商品 A
= Z 量の商品 C
= W 量の商品 D
=

Z 量の商品 C = X 量の商品 A
= Y 量の商品 B
= W 量の商品 D
=

お金って何だろう(お金の絵本プロより転載)

- (以下の9シートが転載部分です)
- お金は商品を購入できる、貸付けて利子を得られる、資本にもなる。
- 人目につくお金(現金)は日銀券やドル札(銀行券)。預金もクレジットカードで支払える。金融資産も換金できる。現代は、キャッシュレスで、スマホで支払える。ではスマホがお金？
- 背景に信用制度(支払い決済システム)がある。
- このような用途がある存在であるお金はどのようにして生まれたか。
- 中央銀行が発行する。市中銀行が預かった以上のお金を貸し付ける。国家が国債を発行する。このような認識でいいのだろうか。
- お金は人々が取引の際につど生成させている、いわば自分の分身だと知ろう。現代の人間論がここから始まる。

お金と商品の歴史上の始まり

- もともと、太古の人間社会にはお金も商品もなかった。自給自足の共同体での交易は生産物を商品として交換せず、したがってお金もなかった。
- 生産物を商品として扱うことは、共同体と共同体とのあいだのお互いに足りない物資の融通から始まったと言われている。それが世界貨幣の生成と、商品交換の共同体内への波及をもたらした。
- しかし、古代オリエントの都市では、コインは発行されず、貸し借り（信用取引）がメインで、小口の取引には大麦が用いられていたことがハンムラビ法典から知られる。共同体内部では信用が先行しコインの発行はこれに遅れた。

お金（貨幣）誕生の秘密と謎（概要）

- 秘密の謎を区別しよう。秘密とはその存在の理由、謎とはそれが目くらましすること。
- 人が労働して物をつくり、それを商品にすることは、物に人が憑りつきモノ（事物）となり、そのモノ（事物）が人を支配する。これがお金誕生の秘密。
- ①お金が生まれる前の商品世界
- ②商品世界では人間の力（対象化された労働）が商品に憑りつく
- ③人間に憑りつかれた商品は社会的象形文字で人にサインを送る
- ④人間はそのサインのすべては理解できないが、貨幣の生成の仕方と価格の表示はわかりそれに従う。モノ（事物）に意志支配される
- ⑤モノ（事物）に意志支配されても支配されているとは感じず逆に利用していると考え

第一形態での商品の語り

- 「商品価値の分析が先にわれわれに語った一切のことを、リンネルが他の商品、上着をと交わりを結ぶやいなや、リンネル自身が語るのである。ただ、リンネルは、自分だけに通じる言葉で、商品語でその思いを打ち明ける。労働は人間的労働という抽象的属性においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルに等しいものとして通用するかぎり、したがって価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成り立っていると言う。リンネルの高尚な価値対称性は糊でごわごわしたリンネルの肉体とは違っているということを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがって、リンネル自身も価値物としては上着と瓜二つであると言う。」(井上康、崎山政毅『マルクスと商品語』、21～2頁、『資本論』長谷部訳、河出書房新社、原典56頁、)

お金の秘密の解明に向けて

- お金は自分(商店主)が商品を市場に出すときに、都度作っていると
いわれても理解できない。
- 経済学では物々交換の不便を回避する手段としてお金が生み出さ
れたといっている。これとマルクスの説とは異なっている。
- マルクスが解明したのは、商品からの貨幣(お金)の生成、そして貨
幣の資本への転化の仕組みを解明して、資本の増殖の秘密をあば
いた。
- 金が貨幣であるとか、価値の実体が抽象的人間労働だといったマル
クスの説は現在現象としては見えなくなっている。それでも妥当なの
かどうか。超感性的な現象形態という見方で納得いくのか。

流通手段としての貨幣は自由に変化する 貨幣の機能の七変化のチャート化

- ○価値尺度 → 価値尺度という機能においては、貨幣の現物は不必要で、観念的な計算貨幣として機能するだけ。(現在貨幣金はこの役割しか果たしていない)
- ○流通手段 → 金地金 → 金鑄貨 → 金鑄貨の摩損 → 流通手段の金の象徴化 → 国家紙幣 → 信用貨幣 → 通貨と呼ばれている。(普通これが貨幣だと認識されている)

独立して存在している貨幣の機能と信用

- ○貨幣蓄蔵 → 貨幣は富一般の化身として蓄蔵衝動を持つ
- ○支払い手段 → 債権債務関係の決済 → 信用 → 利子生み資本(徴利資本=高利資本、古代の都市国家や中世の封建国家で運動していた) → 近代的利子生み資本(近代的信用制度のもとで運動する) → 詳しくは『資本論』第三巻利子生み資本で論じられている。
- ○世界貨幣 → 金地金(金鑄貨は国際取引では鑄つぶされて、国民的制服を脱ぎすてる) → 国際通貨(一国の通貨ドルが支払手段として機能するのは国際的な信用制度が形成されているから)

貨幣の独り言

- 金廃貨論の無意味さ。銀行券が兌換停止されたから、金本位制ではなくなり、また国際通貨ドルも1971年に金交換停止となったから、金はもはや貨幣ではない、という人間の考えは、私たちの存在が人間の制度を越えていることに気づいていない。
- 貨幣は依然として金であり、これが価値尺度として諸商品の価値を規定している。ただ、流通手段としては登場せず、支払手段としても登場しない。貨幣の七変化において金は世界貨幣（各国中央銀行の地下室に金地金としてかくまわれている）としての存在以外は姿を消した。だからどうしたというのだ。人間は信用制度を発達させて、金が姿を消す条件を作っていた。しかし商品に価格をつけることがその裏で貨幣金を作り出していることを思い知るべきだ。

貨幣の独り言(つづき)

- 地域通貨は将来の貨幣や商品交換の代替物となるだろう。ケインズはそれに注目している。
- マルクスは商品・貨幣・資本の廃絶を主張したが、プロレタリアート独裁の国家によってはその実現は無理筋だったことが判明した。
- 貨幣はまず世界貨幣として誕生し、やがて共同体内部に浸透して商品交換がはじまり、労働力を商品化することで成立する資本主義になって全面的な商品交換社会がうまれた。貨幣をなくそうと思えばこの逆の道をたどるべきだろう。つまり国際交易から地域通貨(バーター取引)にしていくのだ。そして賃労働以外の働き方を広める。
- あと、最近では資本主義ではない負債が幅を利かせているが、これは資本主義の発育不全をもたらし、長い破局が始まっている。

第二講への橋渡し

- 今回触れなかった形態規定について
- 簡単な価値形態
- A) 第 I 形態(簡単な価値形態)
- X 量の商品A = Y 量の商品B
- においては、右辺の商品の使用価値が、そのまま価値の化身となっていることをマルクスは形態規定と述べた。これは自然から社会への移行にあたっての反照関係がもたらす作用である。

人類学に託された希望

- 3. まとめに代えて
 - ①商品・貨幣・資本という「目に見えない構造」の解明
 - ②資本への対抗の路線
 - ③階級闘争の理論の総括
 - ④陣地戦の理論確立に向けて
- このような事柄を念頭に置いて基礎講座を進めていきたい。